2023 年 9 月号

合同 No.４７３

「わたしはある」

日本キリスト合同教会教師
坂井　一富

「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる」（ヨハネによる福音書１０章１４～１５節）。

昨年、ＡＩによる近未来のまちづくりのテレビドラマが放送されました。実験都市国家の首相になった高校生に、ＡＩが「コリント人への手紙にあるように、わたしは肉体がないからあなたに純粋に寄り添える」と語ります。パウロは「わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています・・・わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあって苦しみもだえています 」（コリントの信徒への手紙二５章１～２節）と言いました。けれども、この言葉は体からの魂の解放という当時の流行への批判の文脈にあります。主人公は同級生の死によるトラウマ（ギリシア語で傷）や負の感情を自分のＡＩに反映させました。コリントの信徒への手紙一１５章やヨハネによる福音書１４章２節などから、心の解放があればちがう対話になったでしょう。

ヨハネによる福音書は、２１世紀を生きるわたしたちに希望を差し示しています。文章や文献をテキストといいますが、ラテン語で織るという言葉が語源です。「言」、「光」などの経糸（たていと）と、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた（原文は幕屋を張った）」（１章１４節）との緯糸（よこいと）で、一枚織の主イエス・キリストを織り上げていきます。１０章１１節、１４節は「わたしはある、良い羊飼い」とも言えます。主イエスは、神を示唆する「わたしはある／ギリシア語・エゴ　エイミー」（ヨハネによる福音書８章２４節、２８節、５８節、１３章１９節、18章５、６節など）です。「わたしはある」は、「良い羊飼い」の他にも多彩な表現で語られています。

「わたしはある、良い羊飼い」の主イエスは、ベツレヘムで生まれ、ガリラヤのナザレで育ち、地の民と共に生きられました。罪人とみなされた人や異邦人を愛されました。手を置いて病人をいやし、食事を共にし、神の国のたとえ話（パラボレー）で対話をしました。旅に疲れ水を求め、エルサレム神殿のありさまに憤慨し、友の死に涙を流してよみがえらせ、すべての人に開かれた永遠の命を説きました。権力者や指導者の多くは、人びとが主イエスをキリスト（メシア）と信じ従うのをねたみ、恐れて、暗闇で捕らえ予断と偏見で裁判をして、十字架に釘打ち、主イエスの体からは血と水が流れました。しかし、光は闇に勝利しました（ヨハネによる福音書１６章３３節）。復活した主イエス・キリストは、傷が残る体で来て愛する弟子たちの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と重ねて言われました（ヨハネによる福音書２０章１９節、２６節）。夜、漁に出ていたペトロや弟子たち７人を呼び集めて、湖畔に準備したパンと焼魚で朝の食事の交わりをされました（ヨハネによる福音書２１章）。

人間に寄り添うのはＡＩではなく体のある人間です。キリストの体・教会は、主イエスが始められたこのわざを続けます。互いに愛し合い、飼い主のいない羊のような人びとと共に生きます。世の終わりまで、「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について」（ヨハネの手紙一１章１節）。聖霊と協働して、失われた羊を探し出し、暗闇から光に導きます。わたしたちは「良い羊飼い」に愛され、その声を聞き分ける羊です。主イエス・キリストは、愛する弟子たちのためにとりなし祈り（ヨハネによる福音書１７章）、いつも共にいてくださる「わたしはある」という方です。「わたしが父を愛し、父がお命じになったとおりに行っていることを、世は知るべきである。さあ、立て。ここから出かけよう」（ヨハネによる福音書１４章３１節）。